掲載日:2017年07月31日，面名:社会，記事ID:KIJ20170731_01003000100206006
(C)下野新聞社　無断複製転載禁止。

「人生を引き継ぐ覚悟」

ヒロシマ講座 被爆体験伝承者が思い

とちぎ 平和を考える ヒロシマから

笠岡さん（左）の被爆体験を基に高校生が描いた絵を紹介する伝承者の細光さん（中央）と候補者の松岡さん＝30日午後、広島市

被爆者の高齢化が進む中、「あの日」の記憶をどう継承するか―。広島市で始まった国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」3日目の30日、同市の「被爆体験伝承者養成事業」に参加する市内の3人が、広島国際会議場で命の尊さを後世に伝える意義を語った。

3人は、被爆体験証言者の笠岡貞江（かさおかさだえ）さん（84）と本人に代わって語り継ぐ伝承者の細光規江（ほそみつのりえ）さん（53）、伝承候補者の松岡貢実子（まつおかくみこ）さん（57）。同事業は2012年度に始まり、3年間の養成課程を終えた89人（7月現在）が伝承者として広島平和記念資料館や学校などで活動している。

笠岡さんは72年前の8月6日、爆心地から約3・5キロ離れた自宅で被爆した。建物疎開作業の手伝いに出ていた両親は死亡した。

「核兵器の恐ろしさは体験者にしか分からない」。同事業に当初は違和感を覚えた。だが、痛みを共有しようと熱心に取り組む姿に「被爆者は話ができなくなっていく。感謝しなければ」と思い至った。

原爆記憶の風化に危機感を抱いた細光さんは、12年度に応募。壮絶な体験に「自分に受け止められるのか」と葛藤もあったが、今は「笠岡さんの人生を引き継ぐ覚悟」で臨んでいる。

事業開始から5年。同市平和推進課は「伝承者への応募は少なくなく、順調に進んでいる」と説明。一方で「英語が話せる方や若者の参加」を課題に挙げた。

（佐野恵（さのめぐみ））